

2020

第18回 群馬県図書館大会 報告書



令和2年11月26日(木)

会場：前橋市総合福祉会館

目次

全体報告	1
記念講演	
「心地よい日本語、これからの日本語」（金田一秀穂 氏）	4
第1分科会報告	
「コロナ禍における図書館運営」	7
第2分科会報告	
「子どもたちの情報活用能力を育む学校図書館を目指して」	15
参加者の声	20

※ 講師等の発言は、大会当日1回限りを前提とした発言内容を要約したものです。転載・2次利用は固くお断りいたします。

全 体 報 告

事 業 名	第 1 8 回 群馬県図書館大会
日 時	令和 2 年 1 1 月 2 6 日（木） 1 0 : 0 0 ~ 1 6 : 3 0
会 場	前橋市総合福祉会館 多目的ホール
主 催	群馬県図書館協会（群馬県立図書館、群馬県公共図書館協議会、群馬県大学図書館協議会、群馬県高等学校教育研究会図書館部会、群馬県小中学校教育研究会学校図書館部会）
後 援	群馬県教育委員会
大会テーマ	新時代の図書館 ～今だから、図書館としてできること～
日程・内容	1 式典（1 0 : 0 0 ~ 1 0 : 3 0） (1)主催者挨拶 群馬県図書館協会 会 長 稲葉友昭 （群馬県立図書館長） (2)来賓祝辞 群馬県教育委員会 教育長 笠原 寛 群馬県議会 議 長 萩原 渉 (3)後援・加盟団体紹介 群馬県教育委員会生涯学習課 課長 内田善規 群馬県公共図書館協議会 会長 石崎 治 （館林市立図書館長） 群馬県大学図書館協議会 会長 田中麻里 （群馬大学総合情報メディアセンター長） 群馬県高等学校教育研究会図書館部会 部会長 梅澤英明 （群馬県立前橋西高等学校長） (4)表彰式 ①優良図書館群馬県教育委員会表彰 甘楽町図書館（甘楽町） ②群馬県読み聞かせボランティア顕彰 桂萱読み聞かせの会「はぐはぐ」（前橋市） 堤ヶ岡公民館図書ボランティア（高崎市） さくらの会（藤岡市） 下仁田読み聞かせの会（下仁田町） 太田市立宝泉東小学校読み聞かせボランティア（太田市） ③第 5 3 回全国優良読書グループ表彰伝達 川内読書会（桐生市）

日程・内容



優良図書館群馬県教育委員会表彰
甘楽町図書館



群馬県読み聞かせボランティア顕彰
桂萱読み聞かせの会「はぐはぐ」



群馬県読み聞かせボランティア顕彰
堤ヶ岡公民館図書ボランティア



群馬県読み聞かせボランティア顕彰
さくらの会



群馬県読み聞かせボランティア顕彰
下仁田読み聞かせの会



群馬県読み聞かせボランティア顕彰
太田市立宝泉東小学校読み聞かせボランティア



第53回全国優良読書グループ表彰伝達
川内読書会

日程・内容	2 記念講演（１０：３０～１２：００） 演題：「心地よい日本語、これからの日本語」 講師：金田一秀穂 氏（言語学者・山梨県立図書館長） 3 昼食・休憩（１２：００～１３：３０） 4 テーマ別分科会（１３：３０～１６：３０） 第１分科会：コロナ禍における図書館運営 講師：神谷 亘 氏（群馬大学大学院医学系研究科生体防御学分野教授） 小佐野みはる 氏（山梨県富士吉田市立図書館） 第２分科会：子どもたちの情報活用能力を育む学校図書館を目指して 講演：チャレンジ！手がかりは写真だけの調査活動 ～情報センターとしての学校図書館の可能性～ 講師：宮澤優子 氏（長野県下伊那郡高森町立高森北小学校：学校司書）
参加者数	延 べ 人 数：２４５名（式典・記念講演１４７名、分科会９８名） 2019年度実績：３２０名（式典・記念講演１７４名、分科会１４６名）
評価 反省 その他	記念講演では、金田一氏から図書館長、言語学者としてそれぞれの立場から図書館や教育、自分で考えることの大切さなどについてお話しいただいた。参加者アンケートでは「ユーモアを交えながらも物事の本質をつくお話で、ハッとさせられました」「大変面白いお話でした」「これからの図書館の一視座が見えたような気がします」などの感想が寄せられ好評であった。 第１分科会は、コロナウイルス研究の最前線で活躍されている神谷氏と、ユニークな企画の数々を実践する富士吉田市立図書館から小佐野氏と遠山氏、杉山氏を招きコロナ禍における図書館運営について講義していただいた。参加者からは、「コロナウイルスについて研究されている先生の、研究者としてのお話が聞けて興味深かったです」「富士吉田市立図書館のお話は、図書館のイメージを一変させてくれました」などの感想が寄せられた。 第２分科会では長野県高森町立高森北小学校学校司書の宮澤氏から、生徒の情報活用能力の育成、教材研究や公共図書館との連携などについて講義していただいた。また、当日はオンラインミーティングサービス「Zoom」を使い、講師の映像を会場スクリーンに映写し遠隔で講義を行った。参加者からは、「濃い内容で大変勉強になりました」「探究活動や、図書館の活用の仕方について、すぐ実行したいことがたくさんありました」「宮澤先生の発想力、行動力に大変刺激を受けました」「自校だけでなく、大きな枠組みで考え実践していきたいです」「宮澤先生のファンになりました」などの感想が寄せられた。 両分科会とも、分科会担当者が臨機応変に対応しながら運営し、会場設営、研修内容ともに充実していた。 大会運営については、県立図書館職員に「運営マニュアル」を配付し、係ごとに準備を進めた。職員の臨機応変な対応により、大会の日程はスムーズに進行し、予定通りに全日程を終了することができた。 当日は、上毛新聞社が取材に訪れた。

記念講演（概要）

「心地よい日本語、これからの日本語」

金田一秀穂 氏（山梨県立図書館長）

図書館の仕事というのは、情報化時代では、2つの役割になっていくのではないかと思います。1つは電子化。紙の本がなくなるだろうと思う。僕は、大学で1年生にレポートの書き方を教えている。コロナウイルスの影響がなければ、対面で授業を行い、図書館に連れて行き、図書館の使い方を司書に教わる。主に紙の本を使って情報を集めるが、紙に書かれていないインターネットの情報もこれから生きていく彼らにとって重要な情報だろうと思う。しかし、ネット上にはデマなども多い。電波による情報収集の仕方をちゃんと教えてあげなくてはいけないと思うが、それは最終的に図書館がやる仕事になると思う。



話が変わるかもしれないが、読書感想文というものがある。僕は小学校のころ大病をして2年間病院にいたので、2、3年生の間、学校に通っていなかった。そして退院をし、再び学校に通うようになり読書感想文というものを知った。

自分はかなり本を読んでいたので楽勝だと思っていたが、全然書けなかった。どうしてかというと、自分が読んでいた本は読書感想文が書けるような内容の本ではなかったからである。

僕が読んでいたのは、読む本ではなく調べる本だった。百科事典や国語辞典や歴史年表とか地図帳ばかり読んでいた気がする。一番好きだったのは旅行案内書。全国の温泉などを一生懸命調べていた。水上温泉や渋川、もちろん草津なども調べていた。

そういうデータみたいなものは電子化されてよいのではないかと思います。最新情報も入るし、そのほうがよっぽど気が利いている。

図書館の役割は、文学を読むということもあるかもしれないが、調査するための情報を集める場所、情報が集まった場所であると僕は思う。

そういった情報を集約していく能力が図書館に求められていくのだと思う。

文字というものを人間が獲得したのは、2500年くらい前だろうとされている。ブッダ、キリスト、ソクラテス、孔子、マホメット。この5人がいわゆる聖人と呼ばれている人だが、この5人に共通する言語学的な特徴がある。それは、この5人は自ら本を書いていないということだ。文字を書ける弟子たちに伝え、弟子たちが文字を書いている。

ソクラテスは、「文字によって私たちは記憶することを失った」と言っている。例えば、僕たちは携帯電話に番号を登録しているので、番号を暗記していない。僕たちが高校生くらいのときは携帯電話はなかったので、たくさんの電話番号を覚えていた。要するに、記憶力が減退しているのである。

また、ソクラテスは「書いた文字は質問に答えてはくれない」「一方的なやり取りであり、そんなものは勉強ではない」とも言っている。しゃべっている場合は、言い間違いをしても即座に修正できるが、書かれた文字は間違いを修正しない。文字は間違った言説を永遠に言い続けるのである。そういうふうに、文字というものはつまらないもの、とソクラテスは考えている。

文字というものが一般化する時代のはざまに、ソクラテスやブッダやキリストたちは生きていた。そして、無文字文化の知恵を集大成したものを文字文化を持った古代の人たちが私たちに残してくれたのである。

かつて古代の人々がそうしてくれたように僕たちはデジタルで残していくということを積極的に、むしろより良いものとして残していく方法を考えていくべきではないかと思う。においや味などは残せないが、い

わゆる言葉にならない音楽や絵などを僕たちは簡単に残していくことができる。それは大切な知恵、人類の残した価値だろうと思う。僕は、言葉や文字でしか残せなかったが、今、ユーチューバーという人たちは画像で自分たちを表現できる。それはすばらしいことだと思う。

玉石混交だが、そういった価値のある情報を集積できる場所、それは図書館だろうと思う。

ネットにはデマの情報も存在する。アリストテレスは、「教育の目的は、自分で考え、判断し、表現できるようにすることだ」と言っている。いつの時代でもそうだと思う。ほかの人が考えたことを自分が考えたかのように受け売りするのではなく、自分で考えろよ、ということ。そうしないとだまされてしまうから。

時代によって価値観というものは変わる。そのときに自分なりの判断ができる人であれば、間違ったことをしないで済むのではないかと思う。

日本が戦争をしたのもつい最近である。これから70年くらい生きていく子どもたちには、自分たちで判断して、「それは良くない、いやだ」と言ってほしい。今後、必要とされるのは偏差値で現されるような頭の良さではなく、自分で考えて判断し、表現できる、そういった^{そうめい}聡明さや賢さだと思う。そのためにそういった教育を必要とするし、判断するための材料として、「本物」の知識や体験、情報などが必要になるのだと思う。何をもって「本物」とするかは難しいし、分からないが、世の中には確かに「本物」は存在している。

話は少し変わるが、今の日本は^{そんたく}忖度のできる人間が高い評価をもらえる仕組みになってしまっていると思う。しかし、そういった仕組みの中では自分の考えや意見は存在せず、自分の評価者の考えをコピーするだけの人間になってしまう。

僕が大学で教えているのは、外国語学部の学生たち。語学を学んでいる学生たちに、「自動翻訳機があるので、英語を勉強する必要はないのではないか」というテーマを与え半年やってきた。すると、彼らは「外国語学習は必要である」という結論を出してくる。彼らは「外国語学部の先生が出している問題なのだから、必要であるに違いなからう」と考えるのである。

そして、理由は3つある、と無理やりくつつけるのである。大学受験のときに意見文や小論文の書き方などを習う。はじめに結論があって、そのあとに理由を書いていく。そうすると、論理的で良い意見文である、というパターンになっているのだと思うが、それは、書くということを何も分かっていない人間がやっていることだと思う。

初めから結論が出るはずがない。書きながら考える。「書く」ということは「考える」ということだと思う。書くことによって考えがクリアになり、鮮明になる。要するに文字化されていくわけである。固定化して言葉というものになり、それが文字という目に見える形になっていく。そのことによって、自分はこうしていることを考えていたのだと分かってくる。それが、「書く」ことの意味だし、読書感想文の意味だと思う。

小学校のときからいろんな作文を書かされてきたが、作文を書くことの意義は、考えるということ。遠足に行っていたただ面白かったというのではなく、どういうふうに面白かったのか、何が面白かったのか、いろんな思い出が頭の中にぐちゃぐちゃにあったものをクリアにしていく。それが考えていくこと。だから、今あまり書かないが、ラブレターというものはすごく重要なことだったと思う。この女の子好きだな、と思ったとき、それを言葉に変えていく。気持ちや心の揺れとか、動きとか、悲しみとか喜びとかそういうものは言葉では表せないものだが、でもそれを言葉に変えていくことによって、彼女への気持ち、彼への気持ちが文字で固定化されてくる。そして、分かってくるわけである。

考えるということは、結論があったり意見があったりするはずではないのだ。

学生たちには、「君たちはもっと自分の感じたこと、考えたことだけをとりあえず言葉に変えてごらん」「そ



ういうことでもって、自分の考え、自分のオリジナリティというものが作られていくんだよ」ということを今一生懸命教えているところ。でも、なかなかうまくいかない。

僕は、自動翻訳機はすごく良いと思う。翻訳機では「古池や蛙^{かわず}飛び込む水の音」など文学や言葉自体のニュアンスまでは翻訳できないが、そういったものの翻訳は誰にもできないこと。でも、僕らが翻訳しなくてはいけないものは、大抵の場合、文学作品ではなく機械の取り扱い説明書などである。その程度のものであれば自動翻訳機は完璧に翻訳できる。今、小学校で英語を教える、というのがあるが、多分必要ないだろう。英語を勉強する必要はないと思う。

図書館の本というものは自分で考えるということを、材料として教えてくれるものだと思う。「本物」という話をしたけれども、言葉の「本物」というのは図書館にある。夏目漱石の日本語が、井伏鱒二の日本語が、谷川俊太郎さんの日本語が、図書館にはある。あれは、本物である。しかもお金が要らない。もっと言えば、孔子の中国語、李白、杜甫の言葉はそのまま残っている。そういった本物の力を知っておくと、僕らは自分で考えるときに、「あそこに戻ればいい」という気がするのである。孔子のあの言葉に戻る。それがすぐにできる。本というのはそういう価値のあるものだし、これからの考えるための根拠になるものである。図書館はそれを守っているのだと思う。

はじめに、図書館の役割は2つあると言った。これまで話した情報センターとしての図書館と、もう1つはコミュニティーセンターとしての図書館である。

甲府の図書館では、なるべくいろんな人にスペースを貸し出ししている。例えば、中学や高校に行けなかった子どもたち、小学校にも満足に行けなかった子どもたちが、ひょこっと来て勉強できるような教室を作っている。子どもたちが来て、デススパイラルとか貧困のスパイラルから抜け出ることができたらいいなと思う。僕は場所を提供しているだけだが、運営してくださっている人たちがいる。

情報センターとして、コミュニティーセンターとして、図書館は生きていき、子どもたちには、しっかりとしたベースを与える。そういう場として、図書館というのはまだ生きていけると思う。言葉に拘泥しなくていいのではないかな。映像でも音楽でも、そういった様々な情報をきちっと、本物の情報を彼らに伝えられる場であってほしいなと思う。

質疑応答

Q 金田一先生が考える、読書の必要性をお聞きしたい。

A 読書というものは空気みたいなもので、あるのが当たり前すぎて必要性というものは分からない。必要だと思う。

Q 県立図書館の役割や意義とは？

A 10年間で1度も使われなかった本を置くこと。

図書館に併設するものとして本屋を置くのもいいのではないかなと思う。本屋というものが文化的に大切なものだったというのが忘れ去られていっているような気がする。本屋とどう結びついていったらいいかを考えていきたい。

Q 小学校における英語教育の必要性は？

A 言葉という科目は必要だと思う。国語というよりも言葉について考えてほしいと思う。言葉が基礎であるから、日本の場合は日本語だが、言葉でどんなことができるか、どんなことができないか、そういうことを教えられる時間が欲しい。英語に僕は時間を費やしすぎていると思う。

例えば、哲学とか、考え方、そういったことをやるような授業があったらいいと思う。あの時間をもっと活用しようよ、と僕は思う。

第 1 分 科 会 報 告

テ ー マ	コロナ禍における図書館運営
日 時	令和 2 年 1 1 月 2 6 日（木） 1 3 : 3 0 ~ 1 6 : 3 0
会 場	前橋市総合福祉会館 多目的ホール
開 催 趣 旨	昨年度末より発生した新型コロナウイルスにより、各図書館では休館や滞在時間の制限などの対応に迫られた。それにより「場」としての図書館サービスがこれまでになく大きな制約を受け、市民に図書館への関心を促すために行われてきた多くのイベントも、今後はその内容、あるいは開催自体を慎重に検討しなければならない。 そこで第 1 分科会ではコロナウイルス研究の最前線で活躍されている群馬大学医学系研究科生体防御学分野教授の神谷亘氏と、ユニークな企画の数々を実践し2011年度、子どもの読書活動優秀実践図書館として文部科学大臣表彰を受けている富士吉田市立図書館から小佐野みはる氏を講師に招き、コロナ禍において図書館にできる新たなサービスの形を模索した。
日 程 ・ 内 容	13:30～14:40 講義① 群馬大学大学院医学系研究科生体防御学分野教授 神谷 亘 氏 14:40～14:50 休憩 14:50～16:00 講義② 富士吉田市立図書館 小佐野みはる 氏
参加者状況	計 6 2 名（スタッフ 1 6 名含む）
配 布 資 料	小佐野氏よりレジュメ、図書館紹介記事が掲載された雑誌など
係 分 担	講師：群馬大学大学院医学系研究科生体防御学分野教授 神谷 亘 氏 富士吉田市立図書館 小佐野みはる 氏 司会：山谷（藤岡） 接待：織田澤（沼田）、山田（甘楽） 会場：俣田、奥原、志塚、井田（県立） 受付：後藤（渋川）、齊藤（玉村）、廣瀬（富岡）、萬代（草津）、永井（渋工高） 記録：金澤（高崎）、山内（群大） 写真：米山（安中）、外丸（中之条）

講義①:新型コロナウイルスについて

神谷 亘 氏（群馬大学大学院医学系研究科生体防御学分野教授）

皆さん、こんにちは。私自身は、基礎のウイルス学の研究者で、ずっとコロナウイルスを研究している。研究者は学会ではよく話す、一般の方々向けに話す機会はあまりなく、今回はコロナウイルスがどういうものかということを知ってもらえればと思っている。

最初に、この講座で伝えたいことがいくつかある。その1つが、感染症の正しい情報を入手してもらうこと。これが一番大事。2つ目は、感染のリスクを減らすことはできるけれども、ゼロにすることは不可能である、ということ。3つ目は、感染症はゼロにはならないということ。何が言いたいかというと、今回のコロナウイルスが無くなった後も必ず新しい感染症はやってくる。そういう意味で、感染症が無くなることはない。もう1つ、感染した人は何も悪くない。悪いのはあくまでも病原体であってその人ではない、ということをこの講座の中で理解していただきたい。

私は大学の時から24、5年くらいウイルスを研究しており、色々なウイルスがある。皆さんご存じのインフルエンザウイルス、麻疹ウイルス、エボラウイルス・・・この中でも、コロナウイルスがこれほど騒がれるとは思っていなかった。私が大学院生のとき、2003年くらいに今のSARSコロナウイルス1というものが流行り、1年くらいで収束した。卒業時に、更に研究を続けたくて、留学先でコロナウイルスの研究をしたいと教授に相談したら、「コロナウイルスはもう終わったので研究しても仕方がない」と言われた。海外に留学して、帰国後に日本で就職するのがステップアップの1つだが、「あまり流行っていない研究をして日本に戻ってもポジションを見つけることはできない」と言われたことがある。「コロナウイルスを研究してもそれほど知名度が高いわけでもなく、病気もそれほどひどいものではなかったので、そういうウイルスの研究を続けるのは大変だよ」とよく言われたのを覚えている。研究の中でも全く注目されていなかったウイルスが、コロナウイルスというものだった。



SNS等による誤った情報

これほどまでに現在社会をにぎわしている理由が、ウイルス学的に考えるといまいち理解できない。2003年にSARSコロナウイルス1が流行ったが、今から20年ほど前のことで、この20年の間にインターネット、SNSが発達して、その情報過多もあって、実際の社会では正しい情報を見つけるのが難しいと思う。LINE等でほとんどの方がこのような内容のメールを受け取ったかと思う。僕の姉からも全く同じ内容のメールが転送されてきて「これ正しいの？」と聞かれたことが何度かある。この内容には間違っているところはいくつかある。まず、ウイルスは36～37度の温度では死なない。お湯を飲んだところでウイルスは死なない。正しい箇所はひいき目に見ても一文だけ、低温の中でもウイルスは長期間生存する、これは間違いではない。ただ、前後の文章をよく読むとつじつまが合わないことが多い。おそらく、このLINEを送った人は善意で拡散しているのだと思うが、個人的には、ウイルス学研究者がきちんと情報発信すべきだと思っている。ただ、現実的にはできない。研究や授業で毎日忙しく、毎日メディアに出て情報発信するのは僕自身は体がもたない。

コロナ対策について

よくニュースで流れる「三密」対策は、ウイルス学的に見ても正しい対策である。密閉、密集、密接の三密が重なるところが集団発症のリスクが高い。それを考えると、1つでも回避すれば感染を減らすことが間違いなくできる。今回のウイルスの感染ルートは飛沫感染、接触感染などと言われているが、ウイルス学的には飛沫感染がほぼメインだと思われる。マスクやアクリル板で飛沫を防ぐことによって、ある程度感染を止めることはできる。

コロナウイルスに何が効くのかよく聞かれるが、答えは決まって「アルコール」。理由は単純で、非常に安価で手に入りやすい。どうして効くかというと、ウイルスの外側表面にエンベロープという膜があり、私たちの体の細胞の膜の成分を利用している。基本的にエンベロープは私たちの細胞と同じである。アルコールを手にかけると手が荒れるのは、アルコールによって手の表面の脂分が取れているから。ウイルスの表面もエンベロープという脂の膜で包まれているのでアルコールによって外側の脂分が抜けて、ウイルスとしての感染力を失う。コロナウイルスにアルコールが効く、というのは間違いない。ただ、実際に使っていると手が荒れてくる。手が荒れない消毒薬はないのかといわれるが、手が荒れないということはウイルスも死なないということ。手が荒れないアルコール溶剤は、ウイルスにも効かない可能性があるので注意してほしい。

マスクの効果は、最近、WHOもマスクが一番良いと言い始めている。ウイルス学者で著名な東京大学の河岡先生がマネキン2体を使ってウイルスを噴霧し検証した結果、マスクをしたほうが明らかに感染防御効果があると明らかになった。この研究成果が出るまでマスクがどこまで効果があるのかよく分かっていなかった。この実験結果は非常に大事だと思う。

回復されている方も大勢いる

ニュースでよく聞く「COVID-19」は病気の名前で、「SARSコロナウイルス2」が病原体の名前。スライドで示したデータはコロナウイルスの情報が集められたサイトからとってきたもので、世界地図の中の赤い点々がたくさんある北米、ヨーロッパ、南米、インドの感染者が多い。11月4日時点で4,732万人が感染し、121万人が亡くなったということが報告されている。10日後の11月14日では5,331万人が感染、130万人が亡くなっている。わずか10日でこれだけの数に増え、現在進行形で増え続けている。一方で、実際は回復されている方も大勢いる。先週くらいのデータでは、5,440万人が感染し132万人の方が亡くなっている一方で3,500万人くらいの方がきちんと回復されている。もちろん、後遺症の出ている方もいる。毎日のニュースでは、感染者数がアラートとして流れている。それはそれで情報として必要だが、そのうち全員が重症化したのか、あるいは亡くなったのかというところは全く別の問題として認識してもらったほうがよい。

いつマスクを外せるのか

第3波なのか、第2波なのかということはウイルス学的には大事ではなくて、この感染症を今どうするか、を考えなくてはいけない。そもそもウイルスには人間・動物の個体が必要。空気中に漂っているウイルスが分裂して増えることは絶対にない。感染するルート・経路を断てばいつか感染を止めることができる。それがワクチンか、治療薬かは分からないが、いつかマスクを外せる状態にはなると思う。ただ、いつマスクを外す、ということを誰が音頭を取るのか、ここは非常に難しい問題。例えば、この会場に感染している人はほとんどいないと思うので、ここでマスクを外してもクラスターが起きるとは思えないが、ただ、今の状況でマスクをしない、というのはこの社会的な状況ではなかなか難しいというのは皆さんご理解いただけると思う。いつマスクを外せるのか。日本人の場合、マスク警察が出てくる状況もあるので、治療薬ができて、皆さんがワクチンを打ったという段階でようやくマスクを外せるのではないだろうか。

ウイルスって何？

話は少し変わるが、ウイルスに関する映画では「アウトブレイク」、「12モンキーズ」、「バイオハザードレジェンド」などがある。これらのストーリーは共通して、ウイルスがあって、突然変異が起きる、または生物兵器になって、空気感染があって、ワクチンができて終わるという流れだ。ある程度は現実社会と合っている。今の感染症を終えるためには、治療薬またはワクチンを作る以外にはないだろう。ただ誤解してほしくないのが、今の状況は、ウイルスが突然変異しているわけでもなく、生物兵器として作られたわけでもない、空気感染するということも考えづらい。空気感染という言葉は、ウイルス学上の定義ではかなり厳密なもの。コロナウイルスの性質を考えると、飛沫感染であることは間違いない。

ウイルスってどういうものか。簡単に言うと、「自分の力では生きること子孫を殖やすこともやめてしまった世界で一番小さい生物」である。教科書的には生物というキーワード自体も正しくないが。言い換えると、ほかの生物を利用して増えるということ、つまり、ほかの生物を利用してしか増えない、ということだ。

ウイルスは非常に小さいもので、大体0.1 μm 、ホコリよりもPM2.5よりも小さい。電子顕微鏡でしか見ることはできない。その小さなウイルスが我々の細胞の中に入り、自身の遺伝子を出してたんぱく質が作られ、ウイルスが細胞の中でたくさん作られて、外に出ていく、こういった感じで子孫を増やしていく。私たちの細胞がないとウイルスは増えない、ここが細菌との大きな違い。「ウイルス」と「菌」は全く違うものだ。

ウイルスはいつから存在したのかを示す年表がある。人類が出てきたのが2億年前、それよりもかなり昔、46億年前に地球が誕生し、そのあとRNAワールド、DNAワールドというものが出てきた。細胞と呼ばれるものが誕生したのは、RNAワールド、DNAワールドができる間くらいだと言われている。つまり、ウイルスは地球上で非常に古くからいて細胞の誕生とともに生まれた。非常に単純な構造で非常に昔からいたものだ。

エンベロープ

話は少し戻って、アルコールが効くエンベロープを持つウイルスの話をしたが、そのエンベロープ脂質の膜、そういうものを持っていないウイルスもある。例えば、ノロウイルスはエンベロープを持たない。エンベロープを持たないウイルスには基本的にアルコールは効かない。そういうものに対しては次亜塩素酸が効くといわれている。ノロウイルスにはアルコールは効かない、ということも知っておいていただきたい。次亜塩素酸はエンベロープを持ったウイルスにも効く。

太陽光では死なない

最初に見せたLINEには「太陽光で死にます」と書いてあったが、太陽光くらいではウイルスは死なない。ウイルスを扱う実験ではこのような機械を使って青白い光UVを当てて滅菌しているが、UVのエネルギーが大事。太陽光くらいのUVのエネルギーではウイルスが死ぬことはほぼない。

マスクの効果はある？

マスクはどれほど効果があるのか。ウイルスの大きさは、最初にお話したように0.1 μm くらい、一般的な不織布のマスクは5 μm くらいをストップさせることができるがウイルスの侵入は許してしまう。布マスクは不織布よりも穴が大きいのでフィルタ効果はほぼない。ただ、これはウイルスの粒子の大きさを考えた場合であって、実際にはコロナウイルスは飛沫感染するとい話をしたが、飛沫感染の場合、唾と一緒に飛ぶということは、ある程度物質的な質量があり、水滴なのである程度大きさもあり、不織布マスクでも十分に止めることができる。もっと目の粗い布マスクでも、少なくとも何もしないよりは絶対良いので、マスクはしていただきたい。

手洗い・うがいで死ぬことはない

手洗い・うがいで完全にウイルスが死ぬことはない。ただ体に1個ウイルスが入ったくらいでは、体にある免疫で排除することはできると思う。考え方の1つとして、体に入るウイルス量をどれだけ減らすことができるか、ということ。手先についたウイルスを洗い流すことによって感染を防ぐということが十分にできる。薬用せっけんで洗うのはなお良い。今回のウイルスは、手先にウイルスが付いたからといって、その指先から体に入ってくるものではない。呼吸器を通じて、手先に付いたウイルスが口から入ってくることを考えると、手洗い・うがいはぜひやっていただきたい。

PCR検査

PCRという検査法は、簡単にいうと遺伝子DNAを機械にかけて増幅する方法。様々な研究分野で使われている確立した方法で、検出感度は決して悪くはない。どういう検出方法を使っても偽陽性というものは必ずある。偽陽性が出るのが悪いことではなく、検査方法として必ずあるもの。PCRで遺伝子を増やしてここまで出たら陽性、ここまでなら陰性という線引きをしないとイケない、その線引きが非常に難しい。その線引きのギリギリのレベルだと最初は陰性、次に検査したら陽性という現象を学術的に「偽陽性」と呼んでいるだけである。必ず出るもので、偽陽性でない検査方法はない。もう1つ知っていただきたいのは、PCR検査が陰性でも免罪符にはならないということ。例えば皆でPCR検査して陰性だったとしても、街へ出て行って濃厚接触すればあっという間にPCR陽性になる。あくまで測定時に陰性だったというだけで、その後感染しないということまで保証していない。例えば、海外出張に行く前にPCR検査を受けて「私は陰性です」、と使う分にはよいと思うが、皆が皆PCR検査したとしても、今回のコロナウイルスに関しては感染症対策にはあまりならないと思っている。

免疫・ワクチン

少し前にアメリカ大統領が一度感染して、私は免疫があると言っていた。確かに感染した人は病原体に対して免疫はできると思うが、その免疫がどこまで持続するか分からない。いま世界の企業は頑張ってワクチン開発しているが、学術的にはワクチンを作るのは難しくない。ただ、そのワクチンが安全なのか調べるには非常に時間が掛かる。今は緊急時ということだからかなり急いで作っている。出来たワクチンの安全性がどこまで担保されているかは疑問だ。もう1つの問題は、ワクチンも普通の薬も必ず副作用が出てくるというもの。副作用のない薬はない。その副作用が何%出てくるのか、実際にやってみないと分からない。いくつかのワクチンの候補ができて科学技術的に安全ということには賛成できるが、ヒトに打った時にどういう反応が起きるかは基礎研究者でも未知のところはある。

図書館でのコロナ対策

それでは、実際図書館ではどういう対策をしたらよいのか。ウイルス学的に考えた場合、図書館での感染リスクは高くはない。どちらかといえば、低い。三密のリスクを考えると、基本的にはおしゃべりする人は少ない、飛沫が飛ぶことは少ないので感染リスクは低い。それでも、当分はマスクをしておくのが一番良いであろう。手指の消毒、体調の悪いときは利用を控える、基本的なことを守っていれば図書館の中でコロナに感染するリスクは非常に低い。もし感染する可能性があるとするれば、マスクをせずにおしゃべりしているとか、そういうのはよろしくない。もう1つは、人が接するところ。本の貸し借りをするカウンターでは気を付けてもらうと良い。まとめると、図書館の空間において感染する可能性は低い。一般的に言われているマスク・手指衛生消毒または手洗いで十分対応できるのではないかな。

ウイルス研究

後半はウイルスの研究の話をさせていただければと思う。最終的には、ウイルス感染症を無くしたい、それに尽きる。

ウイルス研究には培養細胞というものが気になるので、細胞を育てている。ウイルス単独では増えないので、培養細胞にウイルスをかけて増やす。その作業を安全キャビネットという空気の流れを制御する装置の中でやっている。日本に無いウイルスなどは、海外に行って現地の施設で実験や研究もする。

コロナウイルスは学術的には4つに分類される。ヒトに感染するウイルス、動物に感染するウイルスもある。SARSコロナウイルスはコウモリが持っていたウイルスが何らかの形で人に入ってきたと言われている。MERSコロナウイルスはラクダが持っていたウイルス。今回のSARSコロナウイルス2も、コウモリが持っていたウイルスがヒトの世界に入ってきたと考えられている。コロナウイルス感染症を定義付けると、コロナウイルス科のウイルスによって引き起こされる呼吸器あるいは消化器疾患となる。ブタコロナウイルスに感染すると下痢になる。今回のコロナウイルスは肺炎を引き起こす。呼吸器へ行く性質を持つものや、消化器へ行く性質を持つものなどがある。

コロナウイルスは1931年に鳥で見つかり、その後マウスに感染するウイルス、豚に感染するウイルスが見つかった。1960年代になってヒトに感染するコロナウイルスが見つかるが、症状としては軽い風邪のようなもの。1968年ごろ学術的にコロナウイルスと定義され、2003年SARSコロナウイルス1、2012年にMERSコロナウイルス、2019年に今回のSARSコロナウイルス2が見つかった。10年おきくらいにコロナウイルスが人の世界を騒がせている。

20年前くらいのSARSコロナウイルスも世界中で広がった。症状としてはSARS、MERSも基本的には呼吸器に感染して病気を引き起こす、38度以上の発熱や呼吸器困難、肺炎になる。SARSコロナウイルス1のレゼルボア、自然界で持っている動物はコウモリで、致死率10%と言われている。今から10年ほど前に中東で発生したMERSコロナウイルスはヒトコブラクダから感染するコロナウイルス。症状は呼吸器疾患、致死率は35%くらい。MERSで一つ大事なのは、中東でラクダから感染した人が母国に帰って感染が広がった。韓国の場合、2015年に中東から帰った人が感染し、診断がつかないまま病院を転々としたことで感染が広がったことが問題となった。遠くの国の出来事でも、きちんと情報を入手して知っておくことが公衆衛生上大事で、感染症を止めるためには皆が情報を知ることが非常に大事。今問題の新型コロナウイルスはCOVID-19と呼ばれるが、これは病気の名前。病原体としてはSARSコロナウイルス2、と言われ、1と似た性質であるということ。中国の武漢から発生したウイルスがヨーロッパに入り、ヨーロッパから日本に入ったと言われる。

コロナウイルスへの対応で今後何が大事になるかというと、治療法、ワクチンの確立が大事である。そのために、ウイルスがどう増えてどこで止めることができるか、ウイルスを細かく調べることが非常に大事。ウイルス学も非常に大事であるし、細かな現象をつかむ学問、分子生物学も大事になってくる。どういうことをしているか。ウイルスタンパク質の解析、コロナウイルスの人工合成など。安全な機械、環境で作っている。ウイルスを人工合成してその機能を調べ、そこを狙って薬やワクチン開発に役立てるべく研究している。

ウイルスは突然湧いて出るのではなく、たまたまそのウイルスをもっている動物に我々ヒトが入っていたことにより人類が取り込んで病気になることが多い。ほとんどのウイルスはこういった「人獣共通感染症」である。今後も動物からヒトに感染するウイルスというものが絶対出てくる。今分かっているのは、「デルタコロナウイルス」、鳥類にしか感染しないと紹介したが、実はすでに鳥類からブタの世界に入ってきている。鳥類からブタ、ほ乳類に入ってきているということは、ヒトの世界に入ってきてもおかしくないだろうと言われている。今後も新しい感染症が出てくるだろう、ということで、僕の研究室ではコロナウイルスを人工的に作って、細かい解析をして対応していこうとしている。その中で、ブタの下痢を起こすウイルス、猫の病気を起こすウイルス、新型コロナウイルスの解析を行っている。企業との共同研究も受け入れているので何かあればご連絡をいただければご相談に対応できると思う。

最後に、SARSコロナウイルス2はただの風邪ではないことは間違いない。ただ感染経路を抑え、増えないように対策すれば、それほど恐れるものでもない。

講義②：オンラインでの図書館サービス提供について（ZOOMやYouTube等を活用したイベント事例）

小佐野みはる 氏（富士吉田市立図書館）

富士吉田市立図書館は、蔵書数約26万点、スタッフ数19名（うち会計年度任用職員16名）。直営で運営している。平成23年にリニューアルをしたので、きれいな建物ではある。現在、NGなしを合い言葉に、いろいろな「図書館らしくない」かもしれないが、「富士吉田市立図書館らしい空間」をまじめに造り続けている。



さて、どうしてこのような「らしくない図書館」を掲げているかというと、ブックスタートのときに、お母さんたちと一対一でお話をしたときのこと。「図書館ってどこにあるの？」「昔の図書館なら知っています」という声がとても多く聞かれた。図書館の場所が変わってなく、リニューアルしただけだったのに…。これは大変であるということで、まず、図書館の知名度をとにかく上げないと、名前をとにかく知ってもらわないと。知ってもらえさえすれば、本はたくさんある、お話し会もやっている、楽しい場所だと思うので、とにかく知名度を上げよう。そこからPR活動をどんどん始めることとした。

PR活動を行い、図書館の知名度を上げるため、スタッフ間で、要点整理をした。図書館は公共施設だから、特定の人を楽しめるものではなく、多くの人が楽しめなければならない点を確認した。乱暴な言い方ではあるが、本を読まなくても良いのではないかと、本が好きな人も嫌いな人もとにかく楽しめる施設になればいけない、そしてみんながワクワクするような施設でありたい。図書館に行けば、何かに挑戦できる場所にすることにした。英会話でも良いし、陶芸でも良い。何か一歩目が図書館であれば素晴らしいという考えを確認した。関連本はたくさんあるので予習にも復習にもつながる。そして、最後には、とにかく図書館は楽しい場所であることをみんなに植え付けよう、とスタッフ全員で思いを整理した。

とにかくたくさんのイベントを打っていく。ただのイベントではPRにはならない。当然、お話し会も、工作教室もやっている。それでは、今までやっていることと何も変わりはない。奇想天外想定外のイベントを打ち続けて行くため、スタッフにとにかくやってみたいことをどんどんあげてもらった。予算・人員・時間が足りないは、一切考えなくていい。とにかくやりたいことをどんどんあげてもらった。そうしたら、図書館スタッフは天才だらけで、次々に面白いイベントがあがってきた。そのスタッフみんなの素敵な企画をどんどん実行に移しているところである。全部を紹介したいが、一部を抜粋してご紹介する。

図書館音楽の祭典「としよフェス」イベント。主に山梨県内で活動されている8組のアーティストを招き、図書館でアコースティックライブを開催。

次に、「親子で図書館に泊まろう！BOOK HOTEL」というイベント。タイトルのとおり図書館に親子で泊まってもらう企画。図書館の2階、閲覧スペースにテントを張って、そこで眠りに就くまで図書館の本を楽しむイベント。

そのほかにも、図書館内でスラックラインの体験・挑戦や「おじヨガ」というイベント。対象者がおじさんだけ、自称おじさんなら良いというヨガのイベント。当人たちでなく親に向けた婚活イ

ベント「おせっかい講座」～結婚編～、初潮を向かえる子どもたちに初潮は怖くない、嫌なものではないというお話ができる母と娘の「月経教室」、「歯磨き教室」、「ヨーヨーライブ」、謎解きイベント、「お化け屋敷」、上級シューフィッターが富士吉田市にいますので、靴と足のはなし、もの作りのハーバリウムや羊毛フェルト、様々なイベントを実施した。

今年3月、コロナで完全休館になり、イベントはすべて中止となった。しかし、どのようなときも図書館は楽しい場所でありたい。このような時だからこそ、図書館が面白いこと、楽しいことを発信して行きたい。図書館が楽しい場所であるために、今できることとして「ZOOMを使ったイベント」、「YouTubeを使ったイベント」、「YouTubeでプラスアルファ」で何かできないだろうかとの思いでいろいろ始めてみた。

「ZOOMを使ったイベント」～「おじヨガ」・「ベビーマッサージ」・「お産学校」

地域おこし協力隊とコラボしたイベントの「おじヨガ」は、来館されるおじさまたちの健康やコミュニティなどが気になり、キャッチーなタイトルとポップなイラストを協力隊がすぐに考えて、大盛況・大好評のイベントとなった。メディアにもすごく取り上げられた。コロナ禍となり、こんな時だからこそ、おうちでヨガができないだろうかと考え、ZOOMで「オンラインdeおじヨガ」を始めた。オンラインの良い点は全国に発信できるため、全国各地から参加が可能であることだ。

続いて「ベビーマッサージ」、これもコロナ前から実施していたイベントであるが、地域の助産師とのコラボである。図書館の立場で、子育て支援として実施していた。コロナ禍となり、こんな時だからこそ自宅で気持ちよくなってもらいたいと、オンラインのZOOMでベビーマッサージのイベントを開催。ZOOMのチャット機能を利用し、子育ての不安等や質問をもらい、それに対して先生が全体に質問を返す形で行った。

オンライン「お産学校」も、コロナ禍で母親学級の中止や病院での付き添いが制限となり、不安を抱えた妊婦さんたちに対してZOOMでイベントを開催した。

ZOOMを使ったイベントは、今何が求められているか、市民は何を必要としているかを考えて行わないと全く意味がないものになる。そのため、普段のイベントより決めたらすぐに行動に移さないと、どんどん時代に取り残られてしまい、意味のないイベントになってしまう。ただ、実施してみると普段のイベントより楽しかった。配信をするだけで良いので、準備は簡単であった。

「YouTubeを使ったイベント」～「図書館司書殺人事件」と「BOOK OF THE DEAD」

コロナの前に謎解きイベントとして「学習室殺人事件」を実施していた。図書館の一室に殺人現場を再現、図書館らしいトリックで盛り上げた企画は、設定もトリックもすべてスタッフが作成し、大好評であった。コロナで完全休館になり、こんな時もどんな時もやっぱり図書館は楽しい場所でありたいと感じていた時、ドローンを飛ばしている人と知り合うことができた。ドローンを使って今何かできないか？ 先ほどの殺人事件の謎解きをドローンで撮影できたら、お客さんも来なくても大丈夫だし、面白いことになるのでは、楽しさを届けられるのではということで、スタッフが脚本を書いて、スタッフ全員で出演してドラマ仕立てで「図書館司書殺人事件」を作成した。



第 2 分 科 会 報 告

テ ー マ	子どもたちの情報活用能力を育む学校図書館を目指して
日 時	令和 2 年 1 1 月 2 6 日（木） 1 3 : 3 0 ~ 1 6 : 3 0
会 場	前橋市総合福祉会館 第 1 ・ 第 2 会議室
開 催 趣 旨	学校図書館は、「読書センター」及び「学習センター」としての機能とともに、児童生徒の情報の収集・選択・活用能力を育成する「情報センター」の機能を有している。そして学校司書は、資料の収集や読書案内、カウンターワークなどとともに、教育目標を達成するための「教育指導への支援」が重要な職務である。 しかし、実際の現場では、情報リテラシー能力を児童・生徒が身につけられるよう、学校司書として調査学習の現場でどのように関わり、支援するかが常に課題となっている。そこで第 2 分科会では、長野県下伊那郡高森町立高森北小学校の学校司書：宮澤優子氏を講師に招き、徹底した教材研究に基づく調べ学習を通じた情報活用能力育成の実践を学んだ。
日 程 ・ 内 容	講義「チャレンジ！手がかりは写真だけの調査活動」 13:30～15:00 講義・ワークショップ（前半） 15:00～15:10 休憩 15:10～16:20 講義・ワークショップ（後半） 16:20～16:30 質疑応答
参 加 者 状 況	計 3 6 名（スタッフ 1 2 名含む）
配 布 資 料	レジュメ
係 分 担	講師：長野県下伊那郡高森町立高森北小学校 学校司書：宮澤優子 氏 司会：石関（前西高） 接待：市村（県立） 受付 〔 清水（健大）、小林（藤工）、佐藤（美土里小）、黒崎（前橋）、 会場 〔 武部（上野）、菊池（神流）、森田（富高） 記録：木下（前西）、和田（小野中） 写真：加藤（健大高）

講義「チャレンジ！手がかりは写真だけの調査活動 ～情報センターとしての学校図書館の可能性～」

宮澤優子 氏（長野県下伊那郡高森町立高森北小学校学校司書）

自己紹介

１９９５年から４年間、長野県内の公共図書館に司書として勤めたあと、出産・育児による退職を経て、２００８年から学校司書として図書館現場に復帰し、現在は高森町立高森北小学校学校司書と高森町子ども読書支援センター職員を兼務している。



ワークショップA「田中芳男チャレンジ」

勤務校の５年生を対象に実施している調査学習について、実際の教材を用いながら、ワークショップを交えてお話ししていきたい。これは、ICT環境が未整備の状況下で公共図書館へ自力で行くことも困難な児童に、写真のみの情報提示で「この写真の人物を宮澤先生に紹介せよ」というミッションを達成させるものである。ほとんど学校図書館での調査活動がメインとなるが、教育課程以外の調査に弱い蔵書構成で、どのようにミッションに挑んだのかを紹介する。進め方は、ブレインストーミング（以下ブレスト）を繰り返しながら合間に個人活動を行う手法をとっている。

第１回目のブレストでは、「この写真の人物について知っていることがあるか」「誰なのか、どんな人なのか見当をつけてみる」「紹介するために必要な情報はなにか」を考えさせる。対象児童は、入学後５年間に様々な情報リテラシー、情報活用スキルを身に付けており、それを思い出すよう促すとアイデアが出てくる。しかし、そのアイデアを実践しようと動き始めると、写真の人物の名前が明らかになっていないため調査に行き詰まってしまう。そこで、第２回目のブレストでは「まず何をしたらいいのか」「知るためにどうしたらいいのか」を考えさせる。すると、今までのスキルになかったインタビュー調査という手法にたどり着く。調査活動の幅を広げるために、あえて人物名を伏せているのである。

なお、インタビュー調査が行われることを想定し、学校の職員には事前に、児童が質問に来た場合には名前だけを教えるよう依頼している。調査がある程度進んだ頃を見計らい、次のブレスト「これまでに分かったことを書く」に進む。

この教材の人物は、国立博物館や上野動物園の設立に関わった田中芳男という飯田市出身の本草学者で、海外から様々な種子を持ち込んで栽培植物として日本に普及をさせた人物でもある。この人物の教材としての魅力は、郷土の偉人であり修学旅行先との関連があるということ、功績の割に知名度が低いということ、クラスでセット貸しができる子ども向け資料を近隣の公共図書館が準備していること、郷土資料としての記録が豊富であること、功績の多様さなどがある。地元や地域、既知のものと未知の人物が結びつく、その面白さが感じられる教材である。

チャレンジにあたっては、「資料の準備」「情報の管理」「指導案やワークシート」「アウトプットの段取り」の準備が必要になる。特にアウトプットについては、どのように紹介したいかをブレストし、要望のあった様々な方法に対処する。

またチャレンジ終了後は、シンキングツールや授業記録、成果物の写真、準備したもの、提供した資料など調査の過程で使用したものを一冊のポートフォリオにまとめる作業と、このチャレンジに挑戦している間に使った「調べるためのスキル」をブレストの段階ごとにリストアップする作業を行っている。

私の情報センター運営

1年生の図書館オリエンテーションでは、図書館は読む場所、調べる場所、知る場所、楽しむ場所であるという話を必ずする。これが高森北小の図書館運営の主軸になっているためである。1年生でも図書館の使い方、目次と索引の違いを学習すると図鑑が使えるようになる。

新学習指導要領の中ではこれまで以上に言語活動の充実や探究的な学習などの位置づけが重要視され、学校図書館が教育に果たす役割もますます大きくなっているが、小学校の図書館はまだ学習センターや情報センターとしての機能が未熟であると感じている。

高森町には、目指すべき行政のプラン「第7次まちづくりプラン第二期総合戦略」があり、それを受けて町の教育委員会が高森町教育大綱を策定している。高森北小学校はこの教育大綱を受け、指導方針をまとめたグランドデザインを作成している。さらにそれを受けて学級担任が学級経営案を作成する。また、これと同時に専科案や保健室経営案、図書館経営案も出される。これらすべてが高森の子どもたちを育てるための動きに連動している。学校図書館における人的配置の問題や予算の問題は学校図書館の中だけを見ても解決しない。学校図書館の外側にある自治体や国の法律的な部分や体制的なものを理解し視野に入れて学校図書館を運営すべきと考えている。

知りたいことを調べ、知る子どもたちにするために、高森北小学校の学校図書館経営案の中では、読書センター、学習センター、情報センターの各機能に関して重点目標を立てており、併せてその重点目標達成のための具体的な方策を立てている。情報センターに関しては、「調べ学習に必要な情報リテラシーを知り、実践する機会」とした。この情報リテラシーには、知りたいと思うこと、調べようと思うこと、調べること、調べられること、知ること、知ったことを活用すること、という段階があり、それぞれに手立てが必要である。まずは知りたいと思うことにつながる好奇心の刺激を大切にし、児童との共同調査や館内展示の工夫などを行っている。動機付けの後に進む段階では調べたいときに調べられる環境を確保したい。図書館には物と人と場がそろっていなければならない。学校図書館には本や情報など提供できる物が不足している。しかし教員、司書教諭、司書などが少ない物を駆使し、あるいは公共図書館など外部から調達して支えることができる。加えて空間的な場はもちろんチャンス、時間も必要となる。これらがそろっており、かつ子どもたちにも調べられるスキルがあることが重要である。まだ自分で調べられるスキルが備わっていなければ、レファレンスという選択もある。レファレンスを利用するのも情報活用スキルの1つである。これらが子どもたちに準備ができていのかどうか。こういうことを常に考えながら情報センターを運営している。

地域教材の可能性

地域教材は、子どもたちにとって身近な話題、問題を資料と結び付けることで効力を発揮させることができる。昨年の台風19号による千曲川の氾濫と、昭和36年にこの地域で発生した天竜川の氾濫とを結び付け、防災への意識付けにつなげたクイズ形式の展示が紹介され、地域資料と子どもたちとの結び付け方を研究することの重要性を確認した。

子どもたちは図書館で地域資料に触れることで、公立図書館が地域資料を収集・保存・整理していることを知り、地域資料を図書館が扱う価値が分かり、図書館そのものの存在価値を感じる。また、地域を知って好きになり、自分のことも好きになって将来のことを考えていくということは小学校初期のキャリア教育としても非常に重要である。このことから、地域資料を子どもたちと結び付けて地域教材化するということには大きな価値がある。

地域資料は思っている以上に存在するものであるが、学校司書は公共図書館の司書に比べ地域資

料に関するレファレンスを受けることが少ないため、情報量の全体像を把握しきれていない傾向にある。それを把握するにはインターネットが一番効率的であり、田中芳男についても図書館ネットワークやCiNiiの横断検索をかけると何ページもの検索結果が出たり、Wikipediaには参考文献が記載されていたりするなど、多くの情報が確認できる。これらの情報をうまく使う方法を、ワークショップBで示すこととする。

ワークショップB「ぐんまなぞとき」

ワークショップとして、高森町子ども読書支援センターの活動である、たかもり読書クラブ「ほんとも」で企画中の「たかもりなぞとき」をアレンジした「ぐんまなぞとき」を実際に体験してもらいたい。「なぞとき」とはクイズではなく、見た情報と得た情報を結び付けて謎を解いていくもので、各々の知識量が違って同じように取り組めるという魅力がある。すでに知っている情報が邪魔をして出題トラップにかかるということが多くあり、地域の情報を知らない人の方がかえってスムーズに答えにたどり着く現象が起きるものである。

「ぐんまなぞとき」では、高崎市、前橋市の実際の観光パンフレット（各A、B）と、謎解き用のワークシート2枚（各C、D）が配付された。ワークシートCはパンフレットAのある情報を図式化したものであり、そこで得た情報を元にワークシートDに進み、その指示でパンフレットBから情報を得て最終的にワークシートDから答えが導き出される仕組みとなっている。

パンフレットとワークシートを見比べ、パンフレットのレイアウトや解説の表記法に着目しながらA～Dを総合するという過程で、「桃井小学校の情報を回答者に注視させる」という出題意図がある。この「なぞとき」を通して、地域資料の展示・企画にあたっては、相手は誰か、見せたいことは何かをしぼった形にしないと展示の価値が低くなること、見せたい情報を焦点化することの方法や重要性が確認できた。つまり、地域資料を「魅せる」には、地域資料の展示の仕方、住民との結び付け方、子どもとの結び付け方を研究し、内容を見せるための工夫をすることが必要なのである。そこで、展示である「物」、手を加える「人」、見る人がそれと接触する「場」のように、【「物・人・場」がそろった状態】というキーワードが示された。

高森町子ども読書支援センター

教育現場には「学校司書の転入出により、学びの蓄積が初期化されてしまう」、「出身小学校ごとに児童の情報リテラシー能力が異なってしまう」という課題がある。これらを改善するには「自治体単位で動かなければ意味がない」という思いから活動を始めることにした。まず、高森町教育委員会として島根県の「子ども図書館支援センター」を視察した。知られざる「学習センター、情報センターとして機能している姿」を実際に見て、目指すべき姿を共有したことを経て、高森町子ども読書支援センターは稼働し始めたのである。

高森町子ども読書支援センターが最終的に目指すことは、『高森町教育大綱』の「なりたい自分に挑戦できる子どもたち」を育てることだ。子どもたちが読書活動をより効果的にスムーズに行えるよう、【「しくみ」の確立】を通して、【「物」の確保、「人」の確保、「場」の確保】を実現している。この「しくみ」とは、公共図書館と学校図書館のお互いにもっていることを町内の図書館資源として共有し、共働して、効率的、効果的な図書館サービスが提供できるような仕組みである。社会教育（公共図書館）と学校教育（学校図書館）の間で「物・人・場」を交流するときに生じて

いた手続きや書類を取り払い、既存の物と場と人を有効活用できるようになっている。

このセンターはあくまで仕組みであるため、建物、事務局はなく、予算もイベント用の消耗品程度である。職員は司書（宮澤氏）と学校教育係長の二人だけだが、実働組織の公立図書館司書、学校図書館司書、教育委員会事務局長、学校教育係長、社会教育係長からなる『まめおの会』によって、色々なものがあちこちの施設に提供されている。それらをコーディネートするのが私（宮澤氏）の役割である。子どもと図書館・情報・学びを結び付けるためのイベントである「高森読書クラブ『ほんとも』」は、「物・町の人・場を持つ公共図書館の司書」と、「子どもたちの情報を持つ学校図書館の司書」とがコンビを組み、それぞれが持っている物を持ち合うことで実現されている。

学校支援についても、公共と学校とが互いを知ることで生まれるアイデアが多くあり、その結果、業務改善も進んでいる。「学校図書館」ではなく、【「子ども読書」支援センター】と命名したのは、0歳から高校生までの読書支援を継続的に行うという目的による。高校への支援が手薄なことが現在の課題であるが、電子書籍を糸口に支援するプロジェクトが進んでいる。具体的な実践は以下の通りである。

（１）学習センターへむけての学校支援

- ① 年間単元指導計画にのっとった選書会議による、学校の学びに効果的に役立つ本の選定
- ② 蔵書の横断検索・用務員の業務を活用することによる、円滑な本の貸借
- ③ 出張や資料提供による、司書の授業応援

（２）情報センターへむけての学校支援

- ① 共通教材の作成と共有・司書の出張授業による、足並みがそろった情報リテラシー教育
- ② 図書館の効果的な活用法・著作権、NDCについての研修会による教員支援

（３）読書センターへむけての学校支援

- ① 子ども向けブックリストの作成・それに沿ったイベントによる、計画的な読書支援
- ② 子育て支援・保育園支援・保小連携・小中連携による継続的な読書支援

「私が大事にしていること」

ぶれない「軸」を持ち、子どもたちの学びを常に軸足としている。どんなに振れ幅が大きくなっても、軸がぶれなければ必ず円が描ける。自分の仕事子どもたちの学びにつながっているか、常に意識している。

子どもたちにとって学校図書館は、「唯一の自力で使える図書館」であり、「図書館のスタンダード」である。学校図書館でした指導が、良くも悪くもそのまま子どもたちの図書館像となる。図書館の使い方・図書館の捉えようを子どもの中にこちらの理想とするところまで着実に育てあげられるようにすることで、こちらの望むスタンダードをもった市民・大人が毎年増やせるようにしている。

おわりに

なりたい自分を見つけること、なりたい自分を知ること、なりたい自分になるための術をもつこと、なりたい自分になること。このような「なりたい『自分』への挑戦」に、図書館としてどう関わられるのか。地域のことを知り、郷土のことを愛し、自分の育った町のことを大切に思う気持ちを郷土資料と結び付けて育てるためのキャリア教育の中で、まず、司書が郷土を知り、郷土資料を知ることがどんなに重要かを意識してほしい。

参加者の声（アンケート結果）

記念講演について

- ふわふわとした話の中にもキモがあって、これからの図書館の在り方がわかりました。
- ユーモアを交えながら先生のお考えをお話しいただいたので最後まで楽しく拝聴することができました。ありがとうございました。
- 金田一先生の考える「図書館の役割」について興味深く拝聴しました。先生が考える図書館の意義については、なるほど！と思いました。
- 金田一先生のお人柄の良さと独自の図書館論が聞けて良かった。
- 金田一先生のお人柄が感じられる気軽なトークで幅広いお話をさせていただけてよかった。英語より言葉や哲学を学ぶべきというご意見に納得です。
- 先生の語り口とお話の内容が面白かったです。電子化を進めるにあたってメリット、デメリットがあることをよく考える機会になりました。
- 金田一先生の飾らない率直な言動に考えさせられました。ユーモアを交えながら物事の本質を突くお話ではっとさせられました。子どもたちに必要なのは考える力をつけること、私たちはそのお手伝いをしていければよいと思いました。
- 考えることが大事ということが伝わってきました。図書館としてどのようなことができるかなと考えさせられました。
- 普段聞くことのできない金田一さんのお話が聞けてとても有意義な時間でした。
- 金田一先生のユニークな考えだったり、国語辞典についてだったり、金田一という名前の宿命だったりいろいろと楽しく聞くことができました。

第1分科会について

- コロナウイルスについて研究されている先生の研究者としてのお話が聞けて興味深かったです。
- 神谷先生には素人にも分かりやすくお話しいただき、感染対策は続けますが図書館では感染しにくいことが確認できてほっとしています。
- いろいろな情報がありすぎて、どれを信用すればいいかわかりませんでしたが、分かりやすく教えていただけて勉強になりました。
- コロナの最前線にいらっしゃる方の話が聞けて安心感が得られました。
- コロナ禍における図書館運営について、神谷先生のコロナについての説明はとても分かりやすく勉強になりました。
- コロナ禍のイベントについて勉強になりました。人脈や地域に根差した活動や新しい技術を取り込むことの大切さを知りました。若いスタッフが多くて良いですね。DJ風ともいえる小佐野さんの話し方もすてきです。
- NGなし、仲良く楽しく企画できる最高の職場で良いですね。私は高校の学校司書でイベントを行っていますが、演奏会を吹奏楽部にやらしてもらおうと思いつきました。
- 図書館を身近に感じられる様々なアイデアあふれる工夫に驚きました。個人的には宿泊して本が読めるのが素敵だと思いました。「あれダメ、これダメ」の現況にあって自由に楽しそうな職場であり、だからこそ訪れる人たちも楽しいだろうなと思いました。
- 富士吉田市立図書館のお話は図書館のイメージを一変させてくれました。何より職場の方々が楽しそうでそれが利用者の方たちに伝わるため、のびのびしたポップな明るい図書館になっているのだと思います。自分の固い頭をもう少し柔らかくしようと強く思いました。
- 大会テーマの「新時代の図書館」にピッタリ！楽しい図書館、らしくない図書館素晴らしいです。

第2分科会について

- 実践的な話で分かりやすくとても楽しく講演を聴かせていただきました。生徒に好奇心を持たせる！！面白そうと思わせる！！私も常に思っています。そんな学校図書館を目指します。
- パワフルで楽しい内容でした。
- 図書館の中でのこと、図書資料ばかりではなく図書館周辺の環境も含めてのお話で取り入れるには「人・物・場所」とすべてに準備が必要だと感じました。子どもの観点を大切にされていることが伝わるお話でした。
- 「情報センターとしての図書館」私の図書館のイメージが変わりました。私は中学生に国語を教えている身ですが、明日からすぐ役に立ちそうな内容でした。講師の先生のお話が素晴らしいナイスチョイスだったと思います。宮澤先生のファンになりました。
- 勉強になりました。郷土資料の活用を模索していました。小さな展示すぐにでも真似します。
- 濃い内容で大変勉強になりました。探究活動や図書館の活用の仕方についてすぐ実行したいことがたくさんありました。ありがとうございました。
- 学校図書館と公共図書館が一体となっている地域を作り上げ実践しているのが素晴らしいバイタリティだと思いました。
- とても楽しい図書館でうらやましく思いました。
- 宮澤先生の発想力、行動力に大変刺激を受けました。自校だけでなく大きな枠組みで考え実践していきたいです。
- 惜しげなくノウハウや知識を教えてくださいありがとうございました。高校と小学校では生徒の興味の引かせ方は違うと思いますがありがちな実践ではなく新しいやり方で取り組みをされていてとても勉強になりました。ぜひ参考にさせていただきます。

全般（大会全体、記念講演や分科会）について

- アイデアの宝庫でした。久しぶりの研修、脳みそをフル稼働して面白い図書館づくりをしていきたいと思います。
- コロナ禍にあってこうしたイベントを開催していただけたことに感謝いたします。運営スタッフの方々のご苦労もあってかと思います。
- とても充実した大会でした。このような機会を与えていただけたこと幸せに思います。
- 図書館の方向性、ヒントになった。真剣に考えるべき問題である。
- このコロナ禍の中、図書館大会を開催するという決断は大変なものがあったと思います。ありがとうございました。
- コロナ対策もしっかりされていました。講演も分科会もよかったです。
- 今後のことを考えるきっかけになったので良かったです。
- コロナ禍ですが安心して参加できました。どのテーマもよかったです。
- 全体的にとっても有意義なお話を聞くことができ、とても良い講演、分科会でした。
- 1日通して今すぐにでも取り入れたいアイデアがたくさんあって、とても勉強になる大会でした。

今後取り上げてもらいたい企画（記念講演講師、分科会の講師・テーマなど）

講師

- 群馬県内の作家
- 県立図書館を有意義に利用して成功した著名人
- アドベンチャーレーサー：田中陽希 氏

テーマ

- 資料保存・補修の実習や除籍・資料選定の基準について
- デジタル社会における紙媒体（本）について
- ビブリオバトルの指導について

※ご意見は紙面の都合で若干の編集を加えてあります。

第 18 回 群馬県図書館大会 報告書

発 行 日： 令和 3 年 3 月 4 日

編集・発行： 群馬県図書館協会©